

Vent

音楽教育 ヴァン vol.45

巻頭インタビュー

宮崎 辰

心をつかむ、世界一の「おもてなし」

特集

オンラインによる研究会参加レポート

- ・音楽レシピの会 オンラインセミナー
- ・日本音楽教育学会 第51回大会 オンライン大会

参考楽譜

ギター三重奏『空とぶ宅急便』

映画『魔女の宅急便』より

(作曲:久石 譲 編曲:植村幸市)



先生の笑顔にエール！

オンライン授業に明け暮れる中、学部4年生から「先輩が困っているので相談にのってください」とメールが来た。先輩というのは、小学校2年生の担任をしている新任教員のことである。この学校では、感染予防の一環として歌うことを禁止され、2年生の授業は鍵盤ハーモニカ主体になっているという。「同学年のベテラン先生、3年目の先生も、もうやることないよねと頭を抱えています」とのことだった。

採用試験に合格した4年生たちも加わり、急遽、オンライン勉強会を開いた。状況を確認しつつさまざまなアイデアを伝えたが、要は音楽科教育法の講義で教えたことを応用すれば、無限に取り組みたいことが出てくると気づいてもらえた。別れ際には、「明日の授業が楽しみです」と笑顔になり、翌日には「久々に子どもたちのニコニコ顔が広がりました」と報告してくれた。

音楽の授業づくりは、とりわけ小学校の学級担任にとって個人の努力だけでは難しい部分がある。だからこそ、一緒に教材研究を楽しめるような機会を増やしたい。子どもを笑顔にするのも先生の仕事なら、その先生を笑顔にする仕事がしたい、どんな状況でも音楽は共にあるという思いを強くした。先生方にエール！

有本真紀(立教大学 教授)



Contents

03 巻頭インタビュー

宮崎 辰 (メートル・ドテル)

09 授業者に訊く

宮下靖弘 (長野県上田高等学校 音楽科教諭)

14 特集

オンラインによる研究会参加レポート

- ・音楽レシピの会 オンラインセミナー／オンライン参加ガイド
- ・日本音楽教育学会 第51回大会 オンライン大会

22 Kyogei Presents

音楽診断 あなたのタイプは？

[第10回] 今年のおすすめ名曲編 (2) (監修・解説：山田治生)

24 参考楽譜

ギター三重奏『空とぶ宅急便』映画『魔女の宅急便』より

30 エッセイ

新・音から広がる世界 [第5回] 藤原道山



Shin Miyazaki

巻頭インタビュー

心をつかむ、 世界一の 「おもてなし」

メートル・ドテル 宮崎 辰

レストランでお客様へのサービスを担う“メートル・ドテル”。本場フランスでは、シェフと肩を並べる高度な専門職といわれています。その腕を競う世界大会で、日本人初の優勝を飾った宮崎辰さん。その洗練された感性と磨き上げられた技術から生み出される「おもてなし」は多くの人々を魅了しています。現在は後進の育成に尽力されている宮崎さんに、サービスの真髓やご自身の歩み、そして時代の変化に応じた教育についてお話を伺いました。

聞き手 岩井智宏 (桐蔭学園小学校 音楽科教諭)



音楽でいうと指揮者のような立場ですが、
自分がプレーヤーになるときに
コーチになるときがあるので、
両方の感覚を使わないといけません。

○ 宮崎 辰(みやざき・しん)

Fantagista21代表/Maitre d'hôtel(メートル・ドテル)
日本初のフリーランスのメートル・ドテルとして、複数のミシュラン星付きレストランにてゲストをもてなす傍ら、サービス指導や後進の育成に力を注いでいる。また、レストランサービスマンの地位向上のため、全国各地で講演や企業セミナー、教育事業を手掛ける。著書に『世界一のメートル・ドテルだけが知っている、好感を持たれる60のコツ』(マガジンハウス)／『一流のおもてなし術 メートル ドテル 宮崎辰の流儀』(東京堂出版)／『世界一のおもてなし』(KADOKAWA/中経出版)／『利益を生むサービス思考』(光文社)がある。NHK「プロフェッショナル 仕事の流儀」／BS朝日「オトナの社会科見学」他、テレビ出演多数。

2010年 「シャトーレストラン ジョエル・ロブション」に
メートル・ドテルとして勤務
メートル・ド・セルヴィス杯(第14回)優勝
2012年 Coupe Georges Baptiste主催
サービス世界コンクール世界大会 優勝
2013年 「ジョエル・ロブション」
ブルミエ・メートル・ドテルに就任
2017年 「ジョエル・ロブション」退職
『Fantagista21』設立、現在に至る

プレーヤー兼コーチとして

岩井: 宮崎さんのご職業“メートル・ドテル”とは、どのようなお仕事ですか？

宮崎: レストランのサービス(接客)における総責任者です。ご予約を受けるところから、お出迎え、オーダーテイク、お食事中のゲストケア、そしてお見送りまでの全てを担います。

岩井: 現在はフリーランスで活躍されていると伺いました。

宮崎: 「ジョエル・ロブション」というレストランを退職したあと、サービスの普及活動や現場スタッフの教育事業に力を入れてきました。今も複数のレストランでサービス・スタッフの育成を担当しています。

岩井: 宮崎さんがスタッフの教育において大事にしていることをお聞きしたいです。

宮崎: まずお客様を楽しませることが第一です。お客様が求めていることは多様で、その場の空気感を大切にしたい方、スタッフとの会話を楽しみたい方などそれぞれ異なります。私はメートル・ドテルとして、スタッフ全員がお客様満足のために動いているかどうかを日々チェックしています。

岩井: スタッフ全員を見ていらっしゃるのですか？

宮崎: 一人一人がどう動くのか、どのような個性をもっているのかを把握するようにしています。音楽でいうと指揮者のような立場ですが、自分がプレーヤーになるときにコーチになるときがあるので、両方の感覚を使わないといけません。このお客様には自分に対応するのか、誰に対応させるのか、それを判断するのに五感を使います。嗅覚も大切ですね。例えばお客様を見たときに「きっとタバコを吸われる方だな」と感じたら、吸いたくなるタイミングを感じ取って喫煙所へご案内したり、シェフやスタッフに料理を出すタイミングを指示したりすることも必要です。料理が冷めてしまっ

たは商品価値が下がってしまいます。
岩井: お客様が気付かないところにも気配りがあって、それが結果的に満足につながるのですね。

宮崎: 私はよくサッカーにたとえるのですが、ゴールを決めたのがAさんだったら、それはAさんの判断力と技術力がすばらしかったからです。でも実はBさんが相手を引き付けてくれてスペースが生まれたからAさんへのプレッシャーが軽減された。Bさんは直接ボールに関わっていないけれどゴールに貢献している。皆が同じ目的に向かって動いているから結果につながるのだと思います。

岩井: サッカーでいえば点を取るために、サービスでいえばお客様が心地よく過ごせるようにするために全員が動くということですね。

個の力とチームワークを高めるには

岩井: 宮崎さんの著書『世界一のおもてなし』(KADOKAWA/中経出版)を読んで、「優れたサービスには個の力とチームワークの両立が求められる」という言葉が印象に残りました。個の力を上げ、チーム力を構築するためには、どんなことが必要でしょうか？

宮崎: まずはスタッフ一人一人の経験値と観察力を上げることです。あとは予測する力ですね。「もしかしたら●●かもしれない」ということを常に考えて動く力です。間違えたことに対して謝るだけでは成長もなく、レストランのレベルも上がりません。個人の能力が上がればチームとしての能力も上がっていきます。

岩井: チームワークは後から付いてくるという感覚ですか？

宮崎: 個々の能力が上がらない限りはチームの力も上がらないと私は考えています。個人が引き上がったうえで、横につながる努力も必要です。例えばミーティングをしてルールをつくること。「お客様の満足を高める」という目標に向かって動くことは大事だけれど、だからといって何でもやっていいのではなく、お店のコンセプトがある。それに合う接客はどのようなものを伝えています。

岩井: 皆が高まったからこそ、コンセプトをもう一度見つめ直して方向性を一致させる。それでこそ最大限の力が発揮されるのですね。

宮崎: 毎日のようにミーティングをして、スタッフそれぞれの長所短所を互いに理解しているので、「あの人があそこを担当するなら、自分はここを担当しよう」というふうに判断ができるのです。個人の能力を上げて、互いの強みを尊重しながらチーム力を上げていくことが理想ですね。

岩井: 個の力を上げ、チーム力を上げるために、具体的にどのような教育を行うのですか？

宮崎: 例えばお料理を出すトレーニングでは、水平に出さないとソースが垂れてしまったり、盛り付けの形が崩れてしまったり

します。これには個人のトレーニングが必要で、20時間ぐらい練習すればできるようになります。そのうえで、チーム力として2人で同時に料理を出すトレーニングをしていきます。お客様の動きによって2人のタイミングがずれる場合には、あちらが引いたらこちらも引くという意識がないといけません。自分だけに意識が集中していると、もう1人が止まっているのに先に料理を出してしまうことがあります。相手が動きを止めたときに自分もスッと止められるようになること。これがチームとしてのトレーニングです。

岩井: 個人の技術とスタッフ間のコミュニケーションの両方が大切なのですね。

宮崎: ミシュラン3つ星レストランとなれば技術とチーム力が身に付くまではダイニングでお客様に直接サービスはさせてもらえません。最初のうちはキッチンからホールへ料理を運ぶ毎日です。一人一人の成長度を見ながら、「そろそろ次のステップだ」となればダイニングに立つことが許されます。最初は誰でもできないのは当たり前なので、頭で分かっていることを実践に移せるよう、丁寧に習慣付けるのが教育だと思っています。

宮崎さんは現場を大切にされているからこそ、
多くのレストランに呼ばれているんだなと感じます。



○ 岩井智宏(いわい・ともひろ)

桐蔭学園小学校 音楽科教諭
「音楽を通した人間教育」をテーマに様々な研修会、研究会に参加。イギリス、ハンガリー、アメリカなど海外へも渡り、日本以外の音楽教育にも触れながら音楽の可能性を研究している。平成30年度には文部科学省国立教育政策研究所より依頼を受け実践研究協力校授業者として授業を提案した。執筆では『「常時活動」のアイデア100』(明治図書)など他多数。

「価値付け」を伴うアドヴァイス

岩井：宮崎さんはレストラン全体を見ながらアドヴァイスする立場なのですね。

宮崎：アドヴァイスをしながら、スタッフのレベルを向上させるための存在です。以前はスタッフとして接客をメインにしながら教育も担当していましたが、今はレストランから委託される形ですので、現場に入ってスタッフ一人一人のよいところと足りないところを客観的に見て育てることがメインです。

岩井：育てるという観点では今のほうがやりやすいですか？

宮崎：そうですね。昔はプレーヤーがメインでコーチにもなる、今はコーチングがメインでプレーヤーとしても動く。学校でいうと担任の先生ではなく教頭先生や学年主任といったイメージでしょうか。

岩井：現場を愛する校長先生にも見えます。宮崎さんは現場を大切にされているからこそ、多くのレストランに呼ばれているんだなと感じます。現場のスタッフへの伝え方で何か気を付けていることはありますか？

宮崎：分かりやすく言うことですね。上手にできたスタッフがいたら、具体的に何がよかったのかを伝えるようにしています。例えば、上手にお皿を出すことができていたら、「右からゆっくりお客様にお出しして、笑顔で説明していたのがよかったよ」というふうに具体的に伝えます。

岩井：それはとても大事なことだと思います。学校教育においても学習指導要領が新しくなったのですが、今回加わったポイントの一つが「価値付け」だと考えています。「君がやったことにはこんな価値があるんだよ」と伝えることなのですが、まさに宮崎さんのアドヴァイスの仕方と同じです。「よかったよ」と言うだけでは何がよかったのか子どももピンときませんが、「拍に合わせて足踏みできたのがよかったね」と言うと、自分がやったことの価値が分かって心を開いてくれる。今のお話を聞いて、大人も子どもも同じなんだなと思いました。

宮崎：「ちゃんと見ていたよ」「気付いていたよ」と伝えることが大事ですね。あとはスタッフ一人一人のレベルというのは見れば分かるので、それぞれの個性に合った教え方を心がけています。打たれ強い人には少しズバッと尝试してみたり、言葉だけでなくピンと張り詰めた空気を出してみたりするのです。たまにはピリッとした緊張感や心に響くような恐怖感も必要です。

岩井：怖さだけではなく、ピリッとした緊張感の先にあるもの、根底にあるもののがにじみ出ているのだと思います。

宮崎：サービスマンは役者の一面ももっています。ジェスチャーと目と表現で役を演じ、お客様からもスタッフからも感情を引き出す、いわば「感情接客」というのが私のベースです。全て

の動作、例えばお皿を出すときもお客様と会話をするときも感情を込める。たとえ演技だったとしても、そこに感情を込めるかどうかのポイントです。そうすることで相手がこちらをしっかり見てくださるようになります。

時代の変化とともに

岩井：宮崎さんの新人時代は、どのように接客を教わったのですか？

宮崎：言葉では教えてもらえなかったので、上司や先輩の背中を見て学びました。どういうサービスが喜ばれるのだろうか？と探し、見て、考え、開発していきました。なんとなく見ているのではなく、見方や方向、耳の向きを変えながら。上司の動きを見ていて、後ろを向いているのになんでお客様の声分かるのだろう、などと常日頃から考えていました。

岩井：空間全体に神経が張り巡らされているのですよね。言葉で教えてもらえない場合、学ぶ側にもそうしたことを感じ取る能力が必要だと思います。

宮崎：当時は自ら感じ取って動かないと怒られました。上司と部下で二人一組のチームを組んでいたのも、上司の動きに自分も合わせないといけない。でも今はそのやり方は難しいのです。

岩井：今のほうが難しいですか？

宮崎：そうですね。今の子は吸収力があるので教えればすぐにできるようになります。よく私は「君ぐらいの歳に僕は、そんなことできなかったよ」と言っています。ただ、自分で考えて動くというよりも、指示を出してルールを決めればできるといった傾向が強いです。

岩井：自分でつかむ力が弱いのは、それまで受けてきた教育の影響もあるかもしれません。

宮崎：今は「背中を見て覚えろ」と言っても通用しません。指示待ちの人には、指示待ちばかりしないようにやり方を教えて、自分で動いていけるよう促します。最終的には自分で気付いて、自分の力で成長できるようになってほしいと思っています。

岩井：「自ら成長できるように」という課題は学校教育においても同じかもしれません。今は予測困難な時代に向けた教育なんです。未来が見えなくて、「僕たち教師が言っていることすら10年後は全く違うかもしれない」という時代の中で子どもたちを育てています。10年前に正しかったことが、10年後にはそうでないかもしれない。そうした変化に対応できるようにするには、受け入れる力や自分でつかむ力が必要になってきます。

宮崎：自分でつかむこと、つまり問題解決能力を上げることですね。問題解決能力を上げるためには、間違えたときに「何をやってるんだ」と叱るのではなく、「何をやったのか

問題解決能力を上げるためには、間違えたときに
「何をやってるんだ」と叱るのではなく、
「何をやったのか分かるか？」と考えさせることが
大事だと思います。



分かるか？」と考えさせることが大事だと思います。スタッフがミスをしたら何が違ったのかを考えさせ、お客様が帰られたあとに「さっきの答え分かった？」と聞き、それに対してアドヴァイスするというやり方を心がけています。

岩井：自ら成長していくスタッフの特徴はありますか？

宮崎：伸びる人は「何のためにこの仕事をしているのか」という目的が明確です。伸びる人と伸びない人の差はそこで生まれます。今は面接で元気とやる気があればレストランに入れますが、入ったあとにより高いレベルを目指し、自分のやりたいところまで到達するには、目的や目標があるかどうかが大きく影響します。目的が見えてくると、指示を待つ前に自分から考えて動いていくようになります。レストランは厳しい世界なので、その差が出やすいかもしれません。自分で伸びたいと思う人はどんどん伸びていきます。

岩井：伸びたいと思う子ももちろん失敗はするでしょうが、それがプラスになっていくんですね。失敗を怖がるのではなく「あれもやってみたい、これもやってみたい」と思える子のほうが伸びるのは学校でも一緒です。学習指導要領では「学びに向かう力」と示されています。それをどれだけ伸ばせるかというのが課題ですが、プロの世界も同じなんだなと感じました。

さまざまな経験を糧にして

岩井：お客様に対して料理の説明をされる機会が多いと思うのですが、どのような勉強をされるのですか？

宮崎：自分が所属するレストランであれば、試食があって、どんな材料なのかレシピが渡されるので、容易に説明できます。それ以外のレストランの料理やお酒については自分で勉強して知識を付けます。

岩井：「自己研鑽は自分で」ということも本の中に書かれていましたね。

宮崎：商品を提供している営業マンだと考えると、関連する知識は必須です。今は余暇があれば楽しみのためにも時間を使うようになりましたが、昔はいろいろなことを吸収するのに必死でした。

岩井：僕も昔、授業研究をしすぎて体を壊した時期がありましたが、夢中で勉強したことが今に生きているという感覚もあります。

宮崎：人生の中で、「こうなりたい」という目標に向かって勉強する期間は大切だと思います。もちろん仕事なので、「ここにいる以上、この料理のことは分かっておいてね」と言うことはありますが。とはいえ、接客から学べることはたくさんあるので、学生さんには「アルバイトをするなら飲食店がいいよ」と勧めています。

岩井：実は僕も大学生のときに飲食店で接客のアルバイトをしていて、お客さんと仲良くなることも多かったです。

宮崎：接客に求められるのは人柄です。清潔感があって元気で明るい、それだけあればどこでも通用します。そのうえでフランス料理の知識を得たり、自分になりたい人物を見つけて勉強したり。人の表情を読むことや気の利かせ方なども身に付けられるので、学生時代に接客を経験することは将来にも役立ちます。

岩井：大学時代、音楽だけに集中する友人が多い中、僕は飲食店で働いていましたが、それは間違いではなかったんですね。

宮崎：若い頃はいろんなことに目を向けたほうがいいと思います。私は小学校3年生から高校2年生までエレクトーンを習っていたので、楽譜を見ながら演奏するときは手元をほとんど見ずに弾けましたし、耳も鍛えられました。エレクトーンなので両手両足をフルに使って演奏しますよね。それが今、接客をしながら耳は別の方向に向かせたり、お料理を切り分けるときに右手だけでなく左手も使えたりと、仕事にも生かされているように感じます。

岩井：子どもたちにも「なんで今それをやらないといけないの」と言われることがよくありますけれど、「どこかでつながることがあるんだよ」と伝えたいですね。

宮崎：子どもたちにはいろんなことに挑戦してほしいですし、どんどん好きなことをやってみたらいいと思います。そうした経験がいつかきっと役に立つ。接客をしていたことも、楽器を習っていたことも、それ以外のことでも、将来どこかで「やってよかったなあ」と感じる瞬間があるものですから。



勤務先のレストランにて

本インタビューは2020年1月に行われました。その後、新型コロナウイルスの感染拡大で世の中は大きく変わり、その影響はレストラン業界にも及んでいます。それを踏まえ、コロナ禍の様子や新たな取り組みについて、宮崎さんにあらためてコメントをいただきました。

Q. コロナ禍において、レストランやスタッフの方々はどのような状況でしょうか？

4～5月はレストランの営業が完全にストップしたため、在宅勤務となりました。その間は、スタッフ教育をオンライン会議システムに切り替え、若手スタッフの基礎技術と知識の向上に効果を上げることができました。今まで対面でしかできなかったことが、オンラインでも可能となったことは新しい発見です。

営業を再開した現在、レストランでは安心安全を「見える化」することに力を入れています。スタッフの消毒もあえてゲストから見えるところで行い、空気清浄機の導入や換気など具体的な「見える化」対策をすることで、お客様からの不安の声はなくなり、来店数も増えてきました。

Q. このような状況下で、大切にしたいことや今後の展望を教えてください。

ソーシャル・ディスタンスという言葉が浸透し、人と人が距離をとらなければならない世の中でも、人々は「温かさ」を求めているように感じます。そのため、安心安全を徹底したうえで、より積極的にお客様に話しかけ、気にかけることで、お客様との心の距離を縮めるよう意識しています。

これからの時代は「モノ」より、「トキ」や「コト」そして「ヒト」に価値を見いだす時代が来ると思います。相手を気かけ、人と人とのつながりを大切にすることで、サービス(接客)の価値も上がっていくのではないのでしょうか。

Information



宮崎 辰

『世界一のおもてなし』

KADOKAWA／中経出版

単行本 定価(本体1,400円＋税)／文庫 定価(本体650円＋税)

サービスの技量世界一を決めるコンクールで優勝した著者が語る「サービスの極意」。心を読む技術やチームワークの磨き方など、実践的なポイントを学べる。



岩井智宏先生と宮崎 辰さん。
東京都内で



大河ドラマのテーマ曲について説明する宮下先生

授業者に訊く

本時の授業の位置付け

本時の内容は「音楽と物語の関係性について～『NHK大河ドラマ』テーマ曲の鑑賞と考察～」の第1次です(計2時間)。下記の4つのねらいから、物語の主人公像(イメージ)と、イメージに基づいた楽曲を比較し、考察します。

(1)主人公をできるだけ掘り下げながら、楽曲に期待する具体的なイメージをまとめる。

(2)グループでイメージを共有し、楽曲に期待するイメージを形づくる。

(3)考えたイメージと楽曲との相違点、共通点について考察する。

(4)映画やドラマ、アニメなどにおいて、音楽が担う役割の大きさを認識しながら音楽の魅力を再考察する。

授業の流れ

	学習の内容、学習活動
導入	・ マスクで鼻歌(教科書より『ウィーン、わが夢の街』『翼をください』)。 ・ 資料配布とNHK『麒麟がくる』の鑑賞。
展開	○ NHK『真田丸』の鑑賞と感想。 ・ 登場人物や時代背景などから、現代につながる歴史について考察する。 ○ NHK『独眼竜政宗』『徳川家康』の鑑賞と感想。 ○ 各人物像の掘り下げ。 ○ テーマ曲の鑑賞(比較と考察)。 ・ 作曲家にとってテーマ曲の作曲は特別であり、意欲的な作品が多いことを認識する。 ・ 強いインパクトのある主人公のイメージがどのような音楽的特徴となっているのか考察する。 ・ のちに繁栄する一族と、滅亡する一族で曲の終わりが違うことに注目する。
まとめ	・ テーマ曲の工夫と魅力に、何を感じたかを各自でまとめる。

多角的に学び育む 豊かな感性と音楽への興味

生徒の感性を育むために

Vent (以下、V): 上田高等学校は学習意欲の高い生徒たちの集まる学校ですが、授業を拝見して、主要教科だけでなく芸術の活動にも力を注いでいる印象を受けました。

宮下: 実は、この学校からは多くの有名な音楽家が輩出されています。その音楽家の方々は、この学校に通いながら感性を磨き、演奏技術を身に付けられたのだと思います。卒業後、音楽の道に進む進まないに関係なく、この学校がこれまでと変わらず、生徒の豊かな感性を育む場所であるよう努めるのは、私の使命だと感じています。

V: 授業を受ける生徒たちの姿勢もすばらしかったです。背筋がしっかり伸びていました。

宮下: それは、生徒たちが音楽に対してよい経験をもっているからだと思っています。音楽が好きで、積極的に音楽を選択してきている生徒たちだからこそ、私もどのような授業や指導がよいのだろうといつも考えています。

V: 本日の授業ではYouTubeを活用されていましたが、これまでにYouTubeや動画配信を使用することはあったのでしょうか？

宮下: 放送された番組をDVDやBlu-ray Discに焼いて使用することはありましたけれど、YouTubeを直接見るような活動は、このコロナ禍になってから始めたことです。多くの学校で、必要に迫られてさまざまなことを始められたと思いますが、本校でも授業を配信する教師もおりま

した。実際の授業では使用していませんが、私も試験的に動画を作成したり配信したりしています。

V: YouTubeを使用した授業に、手ごたえは感じましたか？

宮下: はい、感じました。授業の流れの中で、臨機応変にその場で欲しい鑑賞教材を映像付きで扱うこともできますからね。本校は今年、文部科学省WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業のカリキュラム開発拠点校となりました。県内の他のWWL連携校では、音楽の授業で生徒1人1人がiPadを使った創作活動もしていると聞いています。音楽科の授業もこれから新しい方法に変わっていくのかもしれないですね。本校も今後、各教室にWi-Fi環境が整うことになっているので、指導の幅を広げていきたいと考えています。

大河ドラマのテーマ曲から音楽と歴史を学ぶ

V: 本日の授業の導入では、『ウィーン、わが夢の街』『翼をください』を歌いました。宮下先生は「鼻歌で」と指示されましたが、生徒たちはマスク越しでも歌詞を声に出しながらきれいなハーモニーで歌っていましたね。

宮下: そうなんです。「鼻歌で」と伝えると、そのとおり鼻歌で歌うクラスもありますし、本日のように自然に歌詞をつけて歌うクラスもあります。おそらく、本来このクラスは歌唱でもっと声を出せるのだろうなと思います。2曲とも、これまでに数回しか歌っていませんが、生徒たちは歌詞をずっと覚えているようです。

V: 鑑賞活動は大河ドラマのテーマ曲の聴き比べでしたが、このような活動は以前にも行ったことはあるのでしょうか？

宮下: いいえ、今年が初めてです。



導入の『ウィーン、わが夢の街』『翼をください』を鼻歌で歌う活動

V: 授業のアイディアはどのように思い付いたのですか？

宮下: かねてより私は「音楽」と「物語」の関係性、そして音楽のもつ力について生徒に伝えたいと思ってきました。これまで、アニメ『トムとジェリー』『ファンタジア』などを鑑賞したあと、オペラやミュージカルを取り上げていました。ですが、アニメと舞台作品の中間的な教材が欲しいと考えたのです。ちょうど大河ドラマのテーマ曲は、オペラやミュージカルの序曲に相当し、楽想から物語の雰囲気イメージができます。さらにテーマ曲は短いので、聴いていても眠くなったり疲れたりしませんから、生徒たちも1曲1曲を乗り切れるかなと思いました。

V: 8作品全てが3分ぐらいで、先生の解説も生徒たちはみんな真剣に聴いている様子でした。配布されたプリントも充実した内容でしたが、先生は大河ドラマがお好きなのですか？

宮下: そういうわけでもありません。ですが地元が舞台の『真田丸』だけは特別な想いで見ました(笑)。それまでは父の影響で子どもの頃に放送されていた『徳川家康』『独眼竜政宗』『武田信玄』を見ていたくらいです。

V: 先生が授業でも話題に出されたとおり『真田丸』は信州がゆかりの地ですから、生徒たちにとっても身近でしょうね。

宮下: はい。生徒たちには身近なこととして音楽と歴史に興味をもってもらえたらと思い、『真田丸』の部分は掘り下げました。

V: 鑑賞の授業としては、とても対話的だったことが印象に残っています。グループに分かれて話し合うとき、先生が生徒から意見を引き出していく場面では、特にそう感じました。

宮下: コロナ禍で強く感じたのが、「『歌えない授業』で教えよう」と、一方通行になってしまうということです。また、生徒自らに何かを話させたり、アクションをしてもらったりすることの大切さも痛感しました。座学的なことであっても、

ざっくばらんに生徒が意見を言い合える言葉掛けを意識しています。

V: 感想の発表時は、生徒たちがしっかり考えをもって発言する姿と、その語彙力の高さに驚きました。

宮下: 生徒からよい意見が出てくことは多く、私も驚きます。自分の考えを言葉として表現する力は大事ですから、これからも大切に身に付けていってほしいと思っています。

鑑賞から表現へ

V: 1学期はどのような指導をされていたのでしょうか？

宮下: 本校で1学期の授業が始まったのは6月でした。ひととおりの楽典を学習し、映画『アマデウス』を全て見ました。『アマデウス』では、映画を見ながら確認できる振り返りプリントを作成し、映像を途中で停止しながら解説して、プリントの記入を促しました。プリントは、モーツァルトが生きた時代の歴史的背景、ヨーロッパの情勢などを含むものです。社会科の先生にも内容を確認していただきました。1学期は歌唱の授業はほぼできず、夏休みまで『アマデウス』を見ていたので、歌唱活動はほんの数回でした。

V: 歌唱ではどの作品を取り上げられたのですか？



○ 宮下靖弘(みやした・やすひろ)
長野県上田高等学校 音楽科教諭



グループで徳川家康のイメージについて意見を交換し合う



徳川家康のイメージを発表する

宮下: 校歌と『オー・ソレ・ミオ』です。『オー・ソレ・ミオ』では三大テノール*の演奏映像を見せて、聴き比べるようなこともしました。練習は、鼻歌で歌ったり、歌詞を小さな声で言ったりするような形です。『アマデウス』を見終わったあとに、1、2回だけモーツァルトの『Ave verum corpus』を歌いました。短時間で発声法を教えるアドバイスとして「女子はミッキーマウス、男子はお笑い芸人の麒麟の川島さんのような声を、それぞれ出してみよう」と伝え、できるようになったら「その声を維持したまま歌ってごらん」と言うのと、よく歌えるようになりました。授業時間数の都合で、歌唱活動の最後にまでは到達しませんでした。モーツァルトの名曲に触れるところまでは終えられたので、よかったなと思っています。

V: モーツァルトの人となりを知ってから、その人の作品を表現してみるという、

一連の流れになるのですね。

宮下: 『アマデウス』を鑑賞したあとはモーツァルトに対する見方が変わり、新たな視点が加わって、深まるのではないかなと思います。

V: 『アマデウス』と『オー・ソレ・ミオ』、どちらも鑑賞と表現を近づけたご指導だと感じました。

宮下: はい、意識して近づけています。『オー・ソレ・ミ

オ』は教員になってから毎年扱う教材です。私は音楽大学出身で声楽専攻(テノール)ですが、学生時代のいちばんよい思い出は、三大テノールの東京公演のときにバックコーラスの一員としてステージに乗ることができたことです。指導の際にはそのエピソードも話しながら、生の鑑賞教材として私自身も生徒の前で声楽家として本気で歌い、「高校教員がこんな感じで歌うのだから、本物はどれだけすごかったのか想像してほしい」と伝えます。さまざまな角度から作品を説明することで、生徒の声楽への興味の扉を開けたらと思っています。

V: 2学期に入ってから、どのような学習を行っていたのでしょうか？

宮下: 1年生の2学期は、前任の先生がリコーダーアンサンブルのグループ発表をされていたので、私も続けていたのですが、今年度はコロナウイルスの影響で

ギターに変更しました。ギターや弦楽器は音楽経験があっても演奏するのは難しいですね。時間をかけて指導しましたが、生徒たちが目指した演奏には辿り着けなかったグループも多くありました。ですが、うまくいかないという経験こそ大事です。自分たちがうまくできないからこそ、素晴らしい演奏をするプロの音楽家への自然なリスペクトが生まれます。そこで、音楽や音楽家を大切にしようという気持ちをもってくれたらと思うのです。

*ルチアーノ・パヴァロッティ、プラシド・ドミンゴ、ホセ・カレーラスの3名のテノール歌手。

1時間の中で、多くの興味をもつ機会を

V: 本日の授業では、どのようなことが目的だったのでしょうか？

宮下: 感覚を働かせてもらうことです。テーマ曲を聴いて「こういうふうに感じた」と思ったあとに、「どうしてそう感じるのだろうか？」と考えることが重要です。このあとの鑑賞活動では、ミュージカル『オペラ座の怪人』を扱う予定です。

V: 1年生の1年間の目標はどのようなことでしょうか？

宮下: 「こんな曲に出会えた」「作品の背景を知った」など、音楽に興味をもってもらうことです。この学校の生徒たちは、興味さえもてば調べたり表現したり、自力で何かにつなげる力をもっています。



授業のまとめ。プリントに感想を記入する



生徒たちが記入したプリント『大河ドラマ』テーマ曲についての考察」。具体的な考察や感想が多く見られた

1年生は1時間の授業の中で、生徒の興味をもつ機会をなるべく多く提供することを大切にしています。そしてその先の、音楽の要素や仕組みへの興味へとつなげていきたいです。

V: 2年生では、どのような活動があるのですか？

宮下: 今年の2年生が最近学習したのは、定番のコード進行です。YouTubeの動画も活用し「循環コードメドレー」を見せることでも、いろいろな気付きにつながりました。また、昨年の2年生には『レ・ミゼラブル』を見せました。25周年コンサートのライブ盤と、映画です。

V: そのときの生徒たちの反応はどのようなものでしたか？

宮下: 見たあとはみんな感動して泣いてしまっ。ある女子生徒は泣きながら「このあと体育でサッカーしなくちゃいけないのに、先生ひどいです！ ありがとうございました！」と言って音楽室から帰っていきました(笑)。

V: 10代の時期に、よい作品に触れられたことは貴重な経験となったでしょうね。

宮下: そのあとは生徒たちが『夢やぶれて』や『民衆の歌』を英語で歌いたがりました。そこまでの意欲につながったのは、

取材終わりに……



音楽室に保管されていた資料を見せていただきました。

音楽室の入口にあるスチール棚。扉の前がオルガンなどでふさがっていたため、前任の先生の頃から開けていなかったそうです。新型コロナウイルスの影響で学校が休校になった年度始め、宮下先生が音楽室の片付けをした機会に開けてみると、戦後からの各社の音楽科の見本用教科書が出てきたため、整理されたとのこと。そのほかにも各社の目録や商品チラシ、音楽雑誌などの資料がきれいな状態で保管されていました。

すごいなと思いました。『夢やぶれて』は試験の課題曲にして「上手下手は問わないから、歌に対してどのようなことを思い、どう表現したいのかを見せてね」と伝えたら、よい演奏がたくさん出てきました。

卒業後を見据えて

V: 先生は生徒たちが興味をもてるような、さまざまな教材を常に取り入れていると感じました。そのような教材選びの方針には、何かきっかけがあったのでしょうか？

宮下: 私の祖父が中学校の音楽の教員をしていました。そしてその傍らで市民合唱団の指揮者をしていました。祖父が合唱を教えるのを近くで見ましたが、それがとにかく楽しくておもしろかったのです。合唱団員の皆さんも「笑いに行っているのか歌いに行っているのか分からない」とおっしゃって、音楽がいつも生き生きとしていました。合唱団は今年で創立70周年となり、今は私が指揮をしています。祖父に憧れて音楽の世界に入り、祖父の背中を追いかけてたくて音楽の教員になりました。ですから、興味・関心や楽しいと思う気持ちを大切にしたいという考えは、祖父の影響です。

長野県上田高等学校について

長野県上田高等学校は、前身が1874(明治7)年に設立されたのち、1900(明治33)年に独立した全日制・定時制併設の大規模公立高等学校です。今年は120周年を迎えました。校舎は上田市の中心地、上田藩主居館跡に位置し、春は桜、秋は紅葉と美しい四季の彩りに囲まれています。



平成27年度に文部科学省によりスーパーグローバルハイスクール(SGH)の指定を受けて以来、探究活動等のカリキュラムを開発し、生徒の思考力と判断力を刺激したり、プレゼンテーションやポスターセッションによって表現力を磨いたりしてきました。

新しい時代に主体的に活躍する若者を育てるために、学校全体で新しい試みに挑戦しています。



廣田昌彦 先生
長野県上田高等学校 校長

上田高校のシンボル「古城の門」。この門は1789年焼失後、翌年再建された。正門、堀、濠を併せて上田市文化財に指定されており、古城の門の瓦には、松平家の桐紋が刻字されている。現在も正門として使用されている

特集

オンラインによる 研究会参加レポート

音楽レシピの会 オンラインセミナー



岩井智宏 桐蔭学園小学校 音楽科教諭
元東京私立初等学校協会音楽部会主任
日本私立小学校連合音楽部会運営委員

「音楽を通した人間教育」をテーマに様々な研修会、研究会に参加。イギリス、ハンガリー、アメリカなど海外へも渡り、日本以外の音楽教育にも触れながら音楽の可能性を研究している。合唱の分野では、指導法に加え指揮法を大谷研二氏、蓮沼勇一氏に学び、合唱ピアニストでは合唱指揮者の名島啓太氏と共演を重ねる。全国各地の音楽授業講習会、筑波大学附属小学校

高倉弘光氏主宰「音楽授業ラボラトリー」等で講師をつとめる。また、同筑波大附属小学校の平野次郎氏と共に自身の音楽授業セミナー「音楽授業ファクトリー」を主宰。平成30年度には文部科学省・国立教育政策研究所より依頼を受け実践研究協力校授業者として教科調査官来校のもと授業を提案した。「常時活動のアイデア100」（明治図書）など著書多数。

オンラインセミナー開催 全国から集まった多くの参加者

授業支援研究会「音楽レシピの会」では、2013(平成25)年にスタート以来、これまで毎年2回(2014年は3回)、著名な学校現場の先生や作曲者を講師に招き、名古屋で研修会を開いてきました。

2020年は第16回・2月15日のあと、新型コロナウイルスの影響によりオンラインでの開催が決定。桐蔭学園小学校教諭の岩井智宏先生を講師に迎えて、オンラインセミナー第1回(7月26日)、第2回(10月4日)、第3回(12月13日)が行われました。

全日、開催時間は午前10時から12時30分の2時間半で、途中1回の休憩が入ります。セミナーでは、岩井先生の研究

2020(令和2)年は新型コロナウイルスの影響により、多くの研究会や大会の開催が中止となりました。そのような中、オンライン開催を試みた「音楽レシピの会」「日本音楽教育学会」について、参加レポートをお届けします。

まずご紹介するのは、授業支援研究会「音楽レシピの会」オンラインセミナー。2020年は3回のオンラインセミナーが開かれました。講師の桐蔭学園小学校の岩井智宏先生が伝えたのは、Zoom(パソコンやスマートフォンを使って、セミナーやミーティングをオンラインで開催するためのアプリ)を使用した授業実践のポイントや工夫です。模擬授業を含む講習が行われたあとには質疑応答の時間が設けられ、参加者からは多くの質問が寄せられました。

の紹介に加え、コロナ禍での活動を参加者と実践する時間もあり、盛りだくさんの内容となりました。今号では、ヴァン編集部が参加した第1・2回で岩井先生が画面を通じて伝えたポイントについてお届けします。

第1回 わくわくからひろがる創造力

音楽教育現場の現状

現在、地域によってさまざまな形で行われている音楽科の授業の在り方は、「A:課題学習タイプ(ワークシート)」「B:オンデマンドタイプ(一方向)」「C:オンラインタイプ(Zoomなどを使った双方向式)」「D:対面だが歌唱、器楽活動の禁止(制限あり)」と分類できる。

中でも新たな準備となるのは「B」「C」であろう。まず、「B」のオンデマンド授業を行う場合、教師がスマートフォンを活用することが対応策の一つである。スマートフォンでは、撮影から編集、配信まで行うことが可能なため、動画を作成しやすい。また「C」のオンライン授業では、一人で授業を受ける子どもたちが、安心して授業を受けられるような配慮が必要だ。例えばZoomでは、通話以外でも「反応」ボタンやチャットを子どもたちに積極的に活用させて、コミュニケーションを図ることができる。また、インターネット環境の影響で接続に問題が出ることを前提で授業を進めることが必要だ。

創造力ってなんだろう？

創造力とは「学習によって得た力を他のものと繋げていく力」「既存のものを超えていく力」「『なぜ?』をもてる力」であり、問題を解決する能力だけではなく、問題を発見する力こそが重要だと考える。そして、この創造力を活発にするため、教師は「子どもたちにとっていつも認められる空間」をつくる



岩井先生の研究発表の紹介

べきだ。特に音楽の授業においては、子どもたちが安心して心地よい明るい雰囲気が必要不可欠と考える。

認めるうえで大切なポイントは、子どものほんの少しの変化を見逃さず、名前を呼んで、真剣に伝えること。「背筋を伸ばして立てていたね」など、具体的に伝えることも重要である。また、一人をほめると周りの子どもたちに変化が見られる場合もあるため、周囲に目を配り、多くの子どもをほめるようにすることも大切である。

常時活動で大切なこと

常時活動は5つの観点「毎授業の一部」「負荷をかけない」「他者との関わり」「楽しいと感じる瞬間を作る」「音楽的知識・技能の積み重ね」を心がけ、子どもたちの「楽しい」という感覚の上に、ねらいと学びが存在するように指導する。今回使用する教材は、オリジナルも含めて主に「ハロー ハロー」「ハミングワールド」「イー星人でご挨拶」「わらべうた(おてぶし／なっとうゲーム)」「おなかの体操」の5つ。

オンライン授業では、教師と子どもたちの声を合わせてハーモニーをつくる活動もできる。教師の合図で、同じ音や和音をつくる音を、子どもが出してみるというもの。このときに、子どもたち側はマイクをオフにしておくと、より効果的である。「先生にはみんなの声が聞こえないから、みんなの耳だけが頼りだよ」と言葉を掛けると、子どもが音に集中するようになるからだ。また子どもには、教師と自分自身の声しか聴こえないため、響きが聴き取りやすい。その心地よさに気付くことができると、ハーモニーの感覚を身に付けられる。※今回のオンラインセミナーでは、この例を参加者同士で実践する時間が設けられ、この方法の効果を実感できました。

創造的思考は表現

通常時に子どもたちへの目標として設定している「「合唱達人」(5つ)」「しゃきっと立ち／自分1身長／スマイル君／キラ



常時活動で使用する
教材「おなかの体操」

キラ目／たてハンバーガーラップ口)は、オンライン授業においても活用できる。例えば笑顔で歌っていることを示す「スマイル君」は、画面越しでもできている子どもを探して「スマイル君ができているね」など伝えることが可能。さらに、マイクのオフで実際に聴くことができていなくても、表情がよければ「きれいな声が聴こえてくるかのようなよかったよ!」と伝え、子どもたちはよい顔へと変化していく。創造的思考のためには「こういうふうに、表現をしたい」と子どもに思わせることこそ、重要である。※この方法を基に、『夢の世界を』を教材として、参加者どうしで、よい点を探し合う活動を実践しました。

全力になってくれる子どもがいるからこそ、教師には学ぶ心が生まれる。子どもは、つまらない授業ではつまらなような態度をとるので、教師は悩むことが多い。そのようなときは「今日はごめんね、次はがんばるから! ありがとう!」と、次の授業により形をつなげてくことを大切にしたい。

第2回 わくわくからひろがる創造力2

創造力について考える

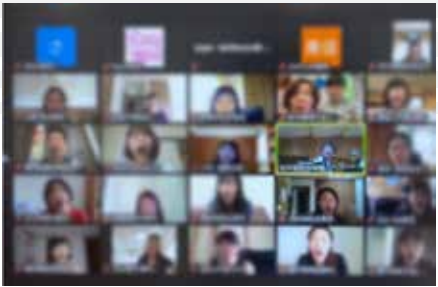
近年「創造力」という言葉をさまざまな場所で耳にする機会が多い。数年前に参加した世界音楽教育学会も「creative(クリエイティブ)」がテーマであった。この「クリエイティブ」は、実はすでに授業の場でたくさん起きているのではないかと考える。子どもが「この曲の歌い方は、あの曲でもやったね」と学習と学習がつながったときや、*mf*に対して「やや強く」ではない言葉を発したときなどは、まさに「クリエイティブ」が表出した瞬間といえる。そこを教師が気付いてすくい上げることがさらなる「クリエイティブ」を引き出すことにつながる。ので、ふだんから子どもたちの発言や行動を注意深く見ることが心がけている。

創造力が活発になる 空間づくり

子どもたちが自然に前向きになる空間こそ、クリエイティブが生まれる場所だ。特に導入での雰囲気づくりは大切に行う必要がある。授業始めに子どもを怒ってしまうと、そのあとの授業に影響するため、気を付けたい。



参加者から寄せられた『翼をください』での指導のポイント



「音楽レシピの会」
第2回オンラインセミナー

現場の先生から「子どものどこを認めたり、ほめたりすればよいか」という質問があるが、ほんとうに小さなことでかまわない。「学校に来てくれた」「いつもはふてくされているけれど、今日は3秒間楽譜を持ってくれた」など、小さなことを「ありがとう」と思うようにして、それを子どもに伝えるだけで、子どもには安心感が生まれる。例えば、不登校の子どもに対して教師は「学校に来るだけでいいよ」と言うが、そのときには既に来ること自体できなくなっている。そのような状況になる前に日常生活の中で、教師が子どもの存在自体を認めて「学校に来てくれてありがとう」と発していくことが、子どもたちの安心につながるのではないだろうか。

また、クリエイティブを生み出す指導法として、『Teaching Music Globally』(2004刊)の中でパトリシア・シアン・キャンベル博士が提唱する「World Musicを取り入れるための5段階のペダゴジー」が参考になる。

創造的思考につながる授業づくり

常時活動で繰り返し小さな活動を積み重ねていくことは、取り組んだ楽曲の幅を広げる機会でもあり、非常に重要であると考え。第1回のセミナーでも紹介した「おなかの体操」や、歌を歌う活動をしなが「たてハンバーガーラップ」や「スマイル君」ができていた子どもを探してほめることは、オンライン授業と対面授業ともに有効だ。

オンライン授業ではタイムラグや接続の問題があり、全員がミュートを外してきれいに歌うことは難しい。しかし、やはり授業の最後にはお互いの声を聴き合うことも試みたい。「ぐちゃぐちゃでバラバラになるけど、一瞬でもみんなの声を聴こうね」と伝えることで、子どもたちはトラブルがあってもあまり動じずに歌うことができるだろう。

※オンラインセミナーでは、『翼をください』を教材として、授業の実践を考える時間を設けました。岩井先生からの「この曲ではどのようなことをポイントに授業に行うか?」という質問に対して、セミナー参加者からは「曲の構成」「前半と後半の違い」「強弱について」など多くの回答が寄せられました。説得力のある授業のためには、教師は「なぜそうするのか?」を事前に考えておくべきであることも確認できました。また、第1回でも実践した「子ども側のマイクをオフにして、教師の声と合わせる活動」も再び試みました。今回は「発信側がアルトを歌い、マイクをオフにした側がソプラノを

歌う活動」でしたが、画面越しでもハーモニーができると響きのよさを感じられることを改めて理解できました。

最後に

今、世界中の人々は新型コロナウイルスという「分からない・見えないこと」に向き合っている。そしてこの先も、人は生きていくと「分からない・見えないこと」を越えていかなければならない。それらに対応する力は、音楽を通して身に付けることができると考える。なぜなら音楽というものは、目に見えないものを構築していく教科だから。

このような状況だからこそ、子どもたちには幸せに笑っていてほしい。人が1日に笑う回数は、大人が15回であるのに対して、子どもは300回だという。つまり、もしも子どもが300回笑わなければ、それは大人の責任だ。子どもが笑う回数の3割を、音楽で占められたらいいと思う。

笑顔がある空間をつくるために必要なのは、教師が子どもたちを好きになること。教師と子どもの関係は相性もあるからときには難しいけれど、子どもの小さな変化を見つけていけば好きになれる。好きになれば、自分も楽しくなっていく。

立派な指導はできなくてもいい。教師が「自分の学校の子どもたちが大好きです」と言えたとき、そこには笑顔があふれていて、授業は偉大なる創造力を生み出す場になっているのではないだろうか。



終了後に寄せられた多くの感想

「音楽レシピの会」について



「わかった！楽しい！」で、現場の先生が「笑顔になる」名古屋が拠点の授業支援研究会です。まずは『先生が楽しい』ために、より多くの手立てや引き出しを持つべく、著名な先生を迎えて“授業のレシピ(指導法)”を発信しています。

2020(令和2)年は新型コロナウイルスの影響により、2月15日に行われた第16回研修会のあとは、Zoomを使用したオンラインセミナーを開催しています。次回は2021(令和3)年2月14日、富澤裕先生を講師にオンラインセミナーが予定されています。



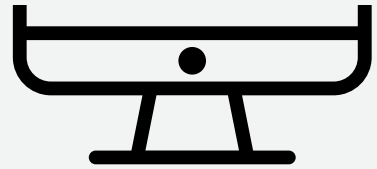
<https://musicrecipe.wixsite.com/m-recipe>

授業支援研究会
「音楽レシピの会」代表
藤田理恵

ロージミュージック代表。2007年まで名古屋市の中学校と小学校で教員を務め、2009年より金城学院大学で小学校教員養成コースの「音楽科教育法」の授業を担当している。

オンライン参加ガイド

セミナーや大会、申し込みから参加まで



ここではオンラインセミナーや、オンライン大会について、一般的な参加手順をご紹介します。

※ 参加方法の詳細は各主催者によって異なります。ご参加の際は要項をご確認ください。

申し込み



(1) ホームページを確認

- 参加を希望するセミナーや大会のホームページにアクセスします。
- 目的のセミナーや大会の案内のページを開きます。

(2) 申し込み・支払い

- 申し込みフォームに名前、電話番号、住所、メールアドレスなどの連絡先を入力します。
- 連絡事項や当日使用するURLは、メールで送られてくることが多いため、特にメールアドレスは間違いのないように注意します。
- 参加費の支払いは、オンライン決済または銀行振込が一般的です。
- 資料や領収書の受け取り方法は、主催者によって異なります。

(3) 申し込み・支払い完了から当日まで

- 開催日の事前に、当日参加するためのURLが送られてきます。この他にIDとパスワード、また登録情報などを確認できるマイページの案内が届く場合もあります。
- 参加費受領の連絡や、当日に関する連絡事項などがメールで届いた際は確認します。

当日



(1) 入室する

- 指定された方法(リンク先、アプリケーション、マイページなど)からアクセスします。
- 事前に主催者から送られてきた参加手順の案内にならって入室します。
- 入力する名前(表示名)は、主催者が把握できるように申し込み時の名前を入力します。
- 主催者側の承認を得てから入室となる場合、アクセスしてから入室までに時間を要することがあります(主催者側が承認なしで入室できる設定をしている場合もあります)。

(2) 視聴

- マイクとビデオはON／OFFに注意し、必要に応じて操作します。
- アプリケーションを閉じるなど、接続を切ってしまった場合は、再度の入室になります。
- インターネットの通信環境がよい状態での視聴がおすすめです。

終了後



アーカイブ視聴の有無については主催者によって異なりますのでご注意ください。

日本音楽教育学会 第51回大会 オンライン大会

(2020年10月17日開催)

プログラム

【午前の部】 研究発表

12のグループに分かれた口頭発表

【午後の部】 会長諮問に基づく緊急プロジェクトチーム企画

会長挨拶「ニュー・ボーダーレスをめざして」
(オンライン大会趣旨説明)

プロジェクト研究「予測困難な時代と音楽教育
—新型コロナウイルス感染症の影響下において—」

常任理事会企画

プロジェクト研究「小・中学校の連携を踏まえた
音楽科授業の実践研究Ⅰ—音楽づくり・創作にお
ける学びの探究—」

総会

新たな可能性を模索して

初めてのオンライン開催にあたり、さまざまな工夫が凝らされていた本大会。申し込みから当日までの手順書、参加者用と発表者用のマニュアルなど、丁寧なサポートが印象的でした。オンライン会議システム「Zoom」の設定や接続チェック、

聴講時の注意事項など、事前にマニュアルを確認しておくことで安心して参加することができました。大会参加者は主催者予想を大きく上回る325名。オンライン開催ということで距離的なハードルがなくなり、遠方からも参加しやすくなったことが一つの要因として考えられます。

同学会会長の今川恭子

次にご紹介するのは、音楽教育に関する研究発表の場として歴史を重ねてきた「日本音楽教育学会」です。新型コロナウイルス感染拡大の影響により初めてのオンライン開催となった同学会の大会。参加者が安心して参加できるよう工夫が凝らされ、最先端の研究発表に存分にふれることのできる充実した時間となりました。

先生(聖心女子大学)の挨拶では、“ニュー・ボーダーレス”という考え方を掲げた本大会の意義が語られました。「コロナ禍における音楽科の状況はたいへん厳しいが、既存の境界線を越えて“こんなことができる”という発見をもたらしてくれるのも確かだ。変わってはならない大切なことを見極めながらも、新たな可能性を見いだしていきたい」という力強いメッセージが届けられました。

多様な研究交流の場を

午前の部では、分野別に分かれて研究発表が行われました。歴史や美学、哲学といった音楽の根源的な内容に関する研究から、保育や学校教育における指導法や授業内容の研究、生涯教育や社会教育に関する研究など多岐にわたります。参加者はA～Lまでの12のミーティングルームに自由に出入りでき、各自の関心に合わせて発表を存分に聴講することができました。

コロナ禍という背景もあり、教育活動の中で先生方が直面している具体的な問題について考察する発表も目立ちました。歌唱など飛沫を広げる可能性のある活動の自粛やグループワークの制限など、最も影響を受けた教科が音楽科だといえるかもしれません。そのような中で、授業前の換気や手洗いを徹底するなどのガイドラインを作成し、今できることを模索しながら真摯に向き合う発表者たちの姿が印象的でした。

音楽教育が直面する課題と 未来への提言

午後の部では、参加者全員が1つのミーティングルームに集合し、2つのプロジェクト研究の発表が順に行われました。1つ目のプロジェクト研究は「予測困難な時代と音楽教育 —新型コロナウイルス感染症の影響下において—」。

伊野義博先生(新潟大学)の司会の下、齊藤忠彦先生(信州大学)、菅裕先生(宮崎大学)、高見仁志先生(佛教大学)、津田正之先生(国立音楽大学)の4氏より研究内容が報告されました。(→P.20～21)

2つ目のプロジェクト研究は「小・中学校の連携を踏まえた音楽科授業の実践研究Ⅰ—音楽づくり・創作における学びの探究—」。佐野靖先生(東京藝術大学)の進行で若手研究者たちからの研究報告が行われました。研究者自ら教育現場でフィールドワークを行い、緻密な検証と分析を重ねてきた本研究。音楽づくり・創作のプロセスを含め、授業改善につながる積極的な提案がなされました。石上則子先生(日本女子大学)の総括では、音楽づくり・創作における教師の関わり方や児童生徒間における認め合い、そして作品への価値付けの重要性が述べられました。

Interview

日本音楽教育学会会長であり、本大会の実行委員長でもある今川恭子先生に、オンライン開催に込めた思いや今後の展望についてお話を伺いました。

Q 今川先生ご自身も大学でオンライン授業をされていたと伺いました。

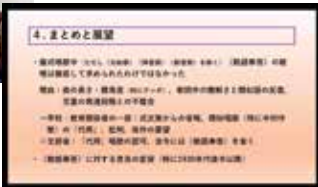
オンライン授業をする中でいろいろな気付きがありました。初めはある種の抵抗感もあったのですが、オンラインによって「いつでも、どこでも」ということがほんとうの意味で可能になり、さまざまな壁を超えることができたのも事実です。諸事情で教室に来られなかった学生がオンライン授業に参加できたという出来事もありました。“ニュー・ノーマル”とは、私たち自身が線を引いていたり、壁を作っていたりしたものを超えることであり、私たちが変わる一つのきっかけでもあったと感じました。

Q オンラインのよさがある一方で、やはり対面でしかできないこともありますか。

対面の授業では「言語で伝えること以上の情報」をたくさん流通させ合っていたという気付きを学生と共有しました。生身の人間が同じ場所でコミュニケーションするということは、言語情報だけではなく、でも感情だけでもない、いろいろな情報が一気に流通していて、私たちは瞬時にやりとりしたり共有したりすることができていたのですね。特に音楽という分野においてはその力が大きかったのだと、あらためて思いました。



有本真紀先生(立教大学)
午前の部・研究発表にて



齊藤忠彦先生(信州大学)
午後の部・プロジェクト研究1にて



石上則子先生(日本女子大学)
午後の部・プロジェクト研究2にて



○ 今川恭子(いまがわ・きょうこ)
聖心女子大学 教授
日本音楽教育学会会長・第51回大会実行委員長

オンライン取材にて

Q 初めてのオンライン大会を終えて、どのような感想をもたれていますか。

オンライン開催だからこそできたことは、海外も含めいろいろな場所からの参加が可能になったこと、発表室から発表室への出入りがスムーズで参加者がさまざまな発表を聴講できたことです。こうしたメリットは、次の時代の研究交流のあり方にも生かしていくべきだと感じました。従来の方法を見つめ直して、こうすればできるのではないかと問いながら工夫を重ねること。オンライン大会で得た技術や学びを今後につなげていきたいと思います。

Q ウィズ／アフターコロナ時代における日本音楽教育学会の役割をどう受け止めていらっしゃいますか。

音楽の授業において、皆で声を合わせることを、息を吹き込んで音をつくることをなくしてしまうわけにはいかないと思います。飛沫の検証実験やリコーダーの扱い方など、科学的なデータを私たちも積極的に協力して出していくこと。声や音を合わせる活動がどうすれば可能になるのか、実証的に示していくことも私たちの一つの務めだと思っています。

ZOOM UP!

日本音楽教育学会 第51回大会 オンライン大会
会長諮問に基づく緊急プロジェクトチーム企画

プロジェクト研究
予測困難な時代と音楽教育
ー新型コロナウイルス感染症の影響下においてー

企画・司会 伊野義博(新潟大学)
話題提供 齊藤忠彦(信州大学)
菅 裕 (宮崎大学)
高見仁志(佛教大学)
津田正之(国立音楽大学)

これからの音楽教育を見つめて

同プロジェクトチームは、2020年5月27日に「新型コロナウイルス感染症対策 音楽教育に関わる情報」と題したウェブサイトを開設しています。その後、以下の3つのテーマについて検討を重ねてきました。

(1) コロナ影響下における音楽教育に関わる情報共有

(2) コロナ影響下における音楽教育の在り方・対策

(3) アフターコロナにおける持続可能な音楽教育の在り方
オンライン大会でのプロジェクト研究発表では、この3つの視点から話題提供が行われました。

(1) コロナ影響下における音楽教育に関わる情報共有

最初に、齊藤氏から「新型コロナウイルス感染症対策 音楽教育に関わる情報」ウェブサイトのコンテンツについての報告がありました[資料①]。海外の情報発信にも力を入れているとのこと。



【資料①】
「新型コロナウイルス感染症対策
音楽教育に関わる情報」
ウェブサイト
https://info.onkyou.com

続いて、菅氏から「コロナ感染症対策下での音楽科授業についてのWebアンケート」の結果に関わる話題提供がありました。主な質問項目は、「コロナ感染症対策下の音楽科授業で最も困っていること」、「クローズアップされた課題」、「音楽の授業について工夫していること」、「今後どのような研修

オンライン大会の午後の部では、参加者全員が同じZoomミーティングルームに入り、全体での企画が行われました(YouTubeでも限定同時配信)。ここでは、全体企画の中から、「会長諮問に基づく緊急プロジェクトチーム企画」として位置付けられた、プロジェクト研究「予測困難な時代と音楽教育ー新型コロナウイルス感染症の影響下においてー」について、当日の様子をご紹介します。

機会や情報の提供、あるいは施設整備支援があればよいか」で、結果は次の3点にまとめられるとのこと。

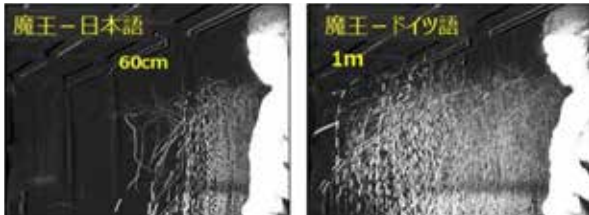
1 教員の遠隔授業実施への関心は高いが、環境が未整備
最大の課題は、児童・家庭側のインターネット環境が整っていないことにある。

2 安全な音楽授業のための手立てや基準の必要性
「あいまいな基準」の中で手探りをしていることが先生方にとって大きなストレスになっている。

3 再表現を中心とする授業の見直し
コロナ禍をきっかけに、既存の楽曲を再表現することが中心となっている現在の音楽科授業について再考を求める声が挙がっている。

(2) コロナ影響下における音楽教育の在り方・対策

まず、齊藤氏から「歌唱時における飛沫可視化実験を通しての研究結果」についての話題提供がありました。さまざまな素材・形状の飛沫防護具の中で「不織布マスク」や「マウスシールド」は飛沫抑制効果が高いこと、通常の「会話」より「歌唱」のほうが飛沫は拡散しやすいこと、ドイツ語に比べて



【資料②】
シュベールの歌曲『魔王』を日本語とドイツ語で歌ったときの飛沫蓄積量

日本語の歌唱のほうが飛沫量は少ないこと[資料②]、飛沫の飛距離には個人差があること、50音の中で「た行」は飛沫量が飛びやすいなど、実験動画を含めながら報告がありました。

続いて、高見氏から、「教師教育/教職支援としての音楽教育に関わる事例(2020年度4月から9月までの状況)」として、以下の3つの内容について動画を交えて報告されました。

1 大学授業や免許状更新講習におけるオンデマンド配信
音楽科特有の臨場感、協働感を出す工夫をした。過去の講義録画をベースに、多数の受講者と協働しているような雰囲気を醸し出す編集を心がけた。

2 現場教員の音楽科研修会の状況
コロナ禍で中止になった研修会が多いこと、歌声や楽器音を出さない活動でも音楽教育の原点を再認識できる研修会にすること、次年度以降に研究発表会を予定している組織ではコロナ禍でも準備としての研修を余儀なくされていること等。

3 教育実習における問題
とりわけ全教科型の小学校教育実習で、音楽科授業にふれる機会が今年度どれほどあるのか問題提起した。また、特例措置による実習期間の短縮、代替活動・授業の容認で、それに拍車がかかる可能性を指摘した。

(3) アフターコロナにおける持続可能な音楽教育の在り方
津田氏から、ウィズ／ポストコロナの音楽教育向け、「コロナ影響下における音楽教育が提起したものは何か？」というテーマで、次の3点に絞って話題提供がありました。

1 知識の質を高めることの重要性
自宅学習下のオンライン授業の試みから、知識理解を深めることの重要性とそのための優れた学習方法が提案されている。

2 全員で元気に歌うことを無定見によしとする指導の見直し
表現活動をサイレントシンギング等も含めて広義に捉えてみると、表現活動の景色が変わる。歌唱等が制限された状況は、個々の子供が自分なりに作品に向き合うことの大切さを提起している。

3 形式的なグループ活動の見直し
近距離での話合いが制限された状況は、友達との対話の

前に、まず一人一人が自ら音楽に向き合い、つくり手や演奏者と「対話」をすること、自分のペースで学びを深めていくことの重要性などを提起している。

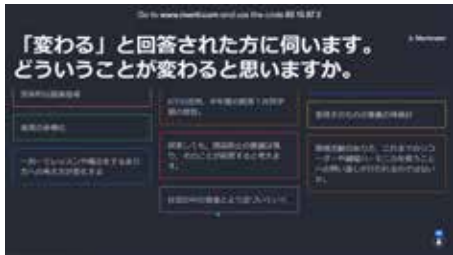
大会参加者との意見交換を経て

本プロジェクト研究の最後に、リアルタイム・アンケートのサービス「Mentimeter」を用いて、オンライン大会参加者によるアンケートをリアルタイムに実施し、その結果をもとにしてのディスカッションが行われました[資料③]。

「コロナ終息後に音楽教育を取り巻く環境は変わるか?／変わらないか?」という問いに対しては、「変わる」と答えた参加者が101名、「変わらない」が8名でした。さらに、「どういことが変わると思うか?」という問いには、「表現の多様化」「音楽を表現することの意味そのもの」「社会の中の音楽とより近づいていく」など、音楽教育の本質に関わる記述も多く見られました。

逆に、「変わらない」と答えた参加者にその理由を尋ねると、「音楽の本質を追求していく姿勢は変わらないと思う」といった回答が出た一方で、「教員のオンラインツールの活用能力に差があるので環境は変わらない」といった課題も挙がりました。

発表者からは「今まで当たり前に行ってきた教育の内容が本当にこれでよかったのか問い直すチャンスでもある」「一斉に同じ表現を求めるような歌唱指導ではなく、一度立ち止まって音楽表現について考えたり、作品に向き合ったりするべきではないか」といった提言がありました。



【資料③】
リアルタイム・アンケート

感染リスクによる音楽活動の排除を危惧する声もある中、私たちもあらためて音楽科の存在意義を問い直していく段階にきているのかもしれません。コロナ禍で試行錯誤しながら行ってきたさまざまな取り組みを、ウィズコロナそしてアフターコロナの時代にどう生かしていくのか。参加者と発表者との意見交換は、音楽教育に関わる一人一人がこの課題に向き合い、ヒントを見いだしていくための有意義な試みとなりました。

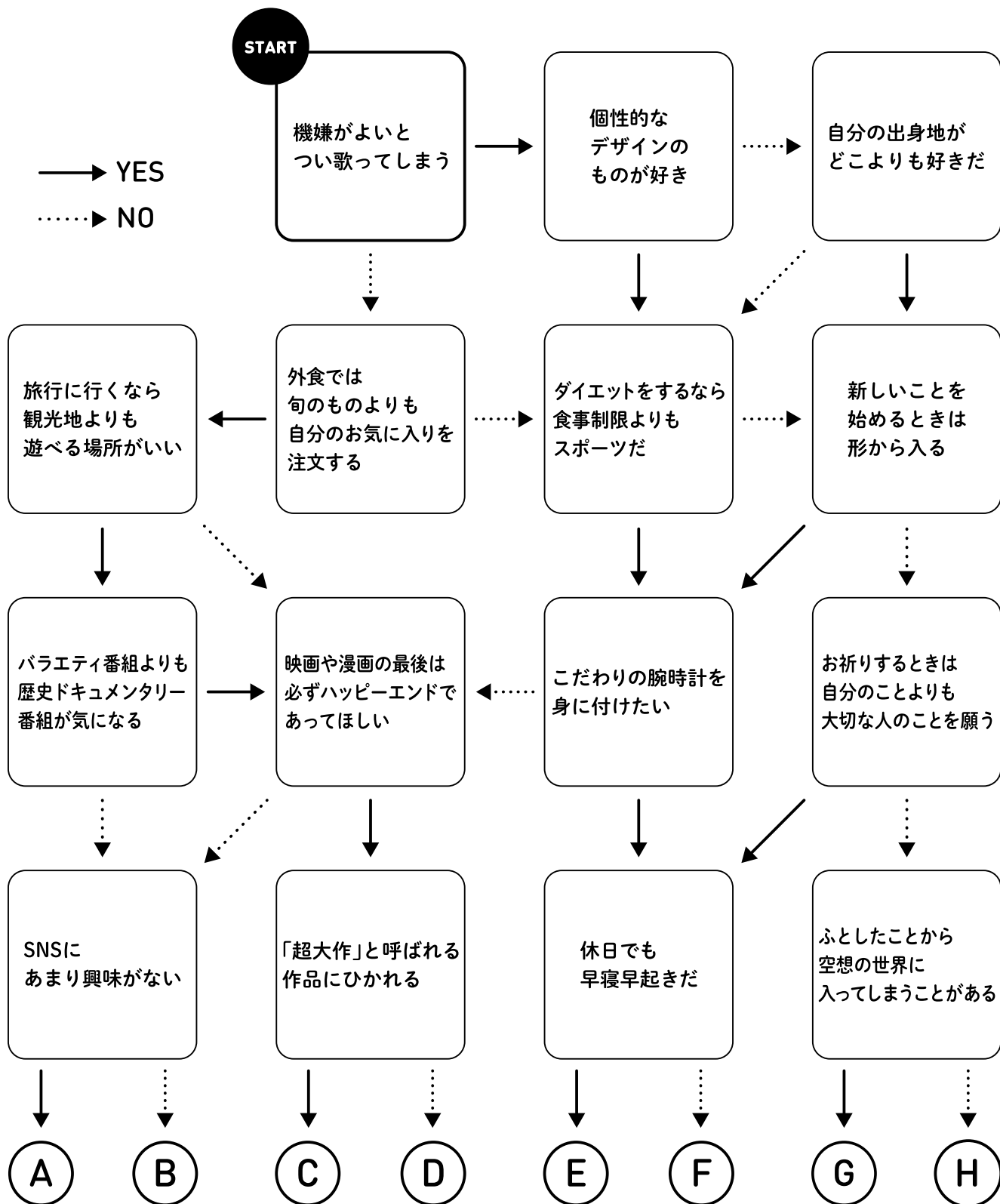
(ヴァン編集部)

音楽診断

第10回 今年のおすすめ名曲編(2)

『ヴァン』オリジナルでお届けする音楽診断企画の第10弾。8つの名曲から、今年のあなたにおすすめの作品をご紹介します。

監修・解説 = 山田治生
Text = Haruo Yamada



あなたへの
おすすめは？

A ユーモアにあふれたコミカルな世界 デュカス 交響詩『魔法使いの弟子』 (初演：1897年／パリ)

デュカスはパリ生まれ。『魔法使いの弟子』は、ゲーテが書いた同名のバラード(詩)に基づく描写的な交響詩。魔法使いの弟子が、師匠の留守中に、聞き覚えた呪文でほうきに水くみを命じ、ほうきは命令通り水をくみ続ける。しかし、弟子は呪文の解き方を知らず、家は水浸しになってしまう。そこに師匠が帰ってくる。ファゴットがほうきの水くみを描写。この作品は、ディズニー映画『ファンタジア』で使われ、人気を博した。



C ダイナミックで迫力満点の冒険物語 ストラヴィンスキー『火の鳥』組曲 (初演：1910年／パリ・オペラ座)

『火の鳥』はストラヴィンスキーの三大バレエ音楽の一つであり、彼の出世作である。ロシア・バレエ団を主宰するディアギレフの委嘱により作曲され、1910年、パリ・オペラ座でロシア・バレエ団によって初演された。魔王カスチエイに捕らわれた王子が、かつて逃がしてやった火の鳥に助けられ、一人の王女と結ばれるというロシアの民話に基づいている。オリジナルのバレエ全曲版のほか、作曲者によって、1911年、1919年、1945年に異なる組曲が編まれた。



E 国と時代を超えて愛される祈りの歌 バッハ『主よ、人の望みの喜びよ』 (初演：1723年／ライプツィヒ)

J.S.バッハは、教会での礼拝のために200曲以上のカンタータを書いたが、『主よ、人の望みの喜びよ』は、彼のカンタータ第147番『心とロと行いと生活』の第10曲にあたるコラールである。印象的な3連符で動く伴奏にのって、なだらかで息の長い旋律が歌われる。オリジナルは、『イエスは私の変わりのない喜び』と歌う宗教的な合唱曲だが、ピアノやオーケストラのほか、さまざまな楽器のために編曲され、演奏されている。



G 自然を愛して書かれた革新的な名作 ベートーヴェン『交響曲第6番《田園》』 (初演：1808年／ウィーン、アン・デア・ウィーン劇場)

耳の病が進行し、人との接触を避けていたベートーヴェンが、心癒やされる自然に対する感謝の気持ちを表した、自然賛歌というべき交響曲。交響曲第5番『運命』とほぼ同時期に作曲され、『運命』と同じ演奏会(1808年12月22日、ウィーン)で初演されたが、劇的な『運命』とは対照的な穏やかで美しい作品。5つの楽章からなり、小川のせせらぎ、鳥の鳴き声、民衆の踊り、嵐などが描写され、最後は、牧歌、自然への感謝の祈りとなる。



山田治生(音楽評論家)

1964年、京都市生まれ。1987年、慶應義塾大学経済学部卒業。著書に『トスカニーニ〜大指揮者の生涯とその時代』、小澤征爾の評伝である『音楽の旅人〜ある日本人指揮者の軌跡』、『いまどきのクラシック音楽の愉しみ方』(以上、アルファベータ)、編著書に『戦後のオペラ』(新国立劇場運営財団情報センター)、訳書に『レナード・バーンスタイン ザ・ラスト・ロング・インタビュー』(アルファベータ)などがある。

B 感動的なイギリス堂々の国民的愛唱歌 エルガー『行進曲《威風堂々》第1番』 (初演：1901年／リヴァプール)

エルガーはイギリスを代表する作曲家。彼は、行進曲『威風堂々』を5曲書き上げているが、その第1番は彼の全作品の中で最も人気の高いものといえるだろう。1901年に作曲された。中間部のゆったりとした旋律は特に感動的である。この旋律はエルガーによってエドワード7世の戴冠式を祝う合唱曲の中でも用いられ、その後、『希望と栄光の国』のタイトルでイギリスの国民的愛唱歌にもなった。ロンドンの夏恒例のBBCプロムスでもおなじみ。



D 美しく華やか！ 技巧も堪能できるピアノ曲 ショパン『ポロネーズ第6番《英雄》』 (作曲年：1842年)

『ポロネーズ』は、ポーランドの代表的な民俗舞曲の形式の一つ。16分音符を含むリズムが特徴的。ショパンのポロネーズのなかで最も有名な第6番『英雄』(英雄ポロネーズ)は1842年に作曲された。「英雄」のニックネームは、作曲者によるものではないが、作品の堂々たる内容をよく表している。半音階を含む序奏のあと、華麗に主題が提示される。中間部では、右手の優美なメロディーと左手のオクターヴでの16分音符の連打との対照が効果的。



F 平和への願いを込めて描かれたスペインの情景 ロドリゴ『アランフェス協奏曲』 (初演：1940年／バルセロナ)

最も有名なギター協奏曲の一つ。ロドリゴは20世紀スペインの作曲家。幼い頃に病で視力を失った。アランフェスとは、マドリッド近郊にある緑に恵まれたオアシス。かつて王宮の離宮があった場所だ。同地を訪れたロドリゴは、目で見ることができなかったが、強い印象を受け、かつての王室の典雅さと民衆の音楽に思いをはせてこの作品を書いた。とりわけ哀愁を帯びた第2楽章は、ポピュラー音楽にも編曲されるなど、広く知られている。



H 時代を先駆けたロマンティックな作品 モーツァルト『クラリネット五重奏曲』 (初演：1789年／ウィーン、ブルク劇場)

クラリネットは、比較的新しい楽器で、モーツァルトが生きていた時代はまだ発展途上の段階だった。モーツァルトは、晩年にクラリネットの名手、アントン・シュタードラーと出会ったのをきっかけに、クラリネット五重奏曲やクラリネット協奏曲を作曲した。この五重奏曲は、クラリネットと弦楽四重奏という編成。死の2年前(1789年)に書かれたこの優美な作品には、モーツァルトのロマンティックな心と澄んだ境地が表れている。



編集後記

この一年ほどで私たちの生活様式はがらりと変わりました。“マスク会食”という言葉まで生まれ、人と人とが距離をとることがあたりまえになってきた世の中。

巻頭インタビューにご登場いただいたメートル・ドテルの宮崎辰さんも、一時はレストランの営業自粛を余儀なくされました。しかし、自粛中もオンラインでスタッフ教育を行い、お客様が安心して戻ってこられるよう、今できることに全力で取り組まれています。

特集では、オンラインで開催されたセミナーや学会の様子をご紹介します。日本音楽教育学会会長・今川恭子先生からの「“ニュー・ノーマル”とは、私たち自身が作っていた壁を超えること」というメッセージ。これからの音楽教育のあり方を見つめ直すきっかけをいただきました。

お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力を賜りました全ての方に、心より厚く御礼申し上げます。今後ともご支援くださいますよう、お願い申し上げます。

表紙・巻頭イラストレーション
スズキタカノリ

写真撮影
白石文丈

写真提供
藤原道山

協力
COTTON CANDY

イラストレーション
こばやしみさこ

表紙デザイン・本文組版
STORK

音楽教育 ヴァン



発行者 株式会社 教育芸術社(代表者 市川かおり)

〒171-0051 東京都豊島区長崎1-12-14

TEL. 03-3957-1175(代)

FAX. 03-3957-1174

<https://www.kyogei.co.jp/>

JASRAC 出 2010015-001

©2021 by KYOGEI Music Publishers. ©-21

本書を無断で複写・複製することは著作権法で禁じられております。



* ヴァン=“vent”はフランス語で「風」。新しい音楽教育の地平を切り開いていく願いを込めています。

Recommend

音楽のキャンパス

ワークシートと鑑賞資料

1/2・3上/2・3下

- 令和3年度から使用される教科書『中学生の音楽1/2・3上/2・3下』に完全準拠した改訂版のワークブックです。
- 「思考力・判断力」を育てるワークシート。「感じ取ったこと」と「その理由」を結び付けて記述する問題を掲載し、考える際の「ポイント」を示しました。
- 「評価の観点」をワークシートの各設問に例示。教員のスムーズな評価、生徒の学習意欲の向上につながります。
- 豊富なカラー写真やイラストとともに、幅広い音楽知識が身に付く「Q&A」「豆知識」「トピックス」を掲載。
- 各定価(本体400円+消費税)/B5判/各48ページ
※2021年2月発売予定

音楽のキャンパス3

- 平成28年度から使用されている教科書『中学生の音楽2・3下』に完全準拠したワークブックです。令和3年度の新3年生はこちらをお使いください。
- 定価(本体410円+消費税)/B5判/72ページ

音楽の鑑賞資料と基礎学習

- 「鑑賞資料」と「音楽の基礎知識とその問題集」で構成。自学自習にも使えます。
- 鑑賞資料ページは、西洋音楽だけでなく、日本音楽や世界の諸民族の音楽、日本の歌についての解説も充実。
- 巻末には、「合唱曲チェックノート」「鑑賞記録ノート」「五線ノート」などを掲載。
- 定価(本体800円+消費税)/B5判/128ページ
- ISBN978-4-87788-962-3
※2021年1月発売予定

6訂版 歌はともだち

- 授業・行事・集会等の豊かな音楽活動をしっかりサポートした135曲を収録。
- 通常のもくじとは別に歌の手引きが充実。授業や行事など、ねらいや場面にあった曲が探せます。
- 定価(本体364円+消費税)/B6判/176ページ
※2021年2月発売予定

【別売り】

指導用伴奏集

- 定価(本体5,000円+消費税)/B5判/3巻セット
- ISBN978-4-87788-959-3

準拠CD 上巻/下巻

- 各定価(本体9,000円+消費税)/各4枚組
- 上巻: GES-15602~15605
- 下巻: GES-15606~15609
- ※2021年3月発売予定



各商品の詳細はこちらから
ご覧いただけます。